

事業報告書（令和5年度）

事業名 留学生による外国にルーツを持つ生徒への教科学習支援・多文化共生プログラム

団体名 週末エウレカ 担当者名 謝芯怡

※活動の様子がわかる写真と説明を必ず添付してください。

1. 活動内容（日時、場所、参加対象者、人数、内容等）

週末エウレカでは、2023年度は以下の主要活動を実施し、外国にルーツを持つ子どもたちの教育支援に尽力した。

(1) 教科学習支援

- 対象：小中学生、高校生
- 日時：6月から2月の毎週土曜日 18時から20時に、岡山国際交流センターで全教科の学習指導、日本語教育を実施。
- 人数：各回3～5名の生徒が参加。
- 場所：岡山市国際交流センター
- 内容：活動は、主に日本語学習能力の向上と、日本語が理解できないために子供たちが学校の教科問題を解けない状況を解決することに焦点を当てている。最初は、『標準日本語初級』という教材を使って、子供たちがゼロから日本語を学ぶお手伝いをしている。その後、子供たちが学校に入学した後は、中学校・小学校の指導計画に基づいて、学校内での日本語用語を教える。また、日本語学習支援以外にも、活動の後半では数学、化学、物理学、社会科の科目を補助する。わからない問題がある場合は、留学生のボランティアの先生と一緒に学習する。最後に、私たちの活動の子供たちは、中国から来たか、中国の背景を持っている子なので、時々、子供たちが日本に来た後に、中国語が退化したり、ピンインが十分に基礎を築いていないなどの問題に挙げた場合には、母語教育も基礎から教える。

(2) 留学生ボランティアの育成

- 留学生ボランティア同士で定期的な振り返りの機会を設け、お互いに課題を共有し、スキルアップを図った。

(様式第8号)



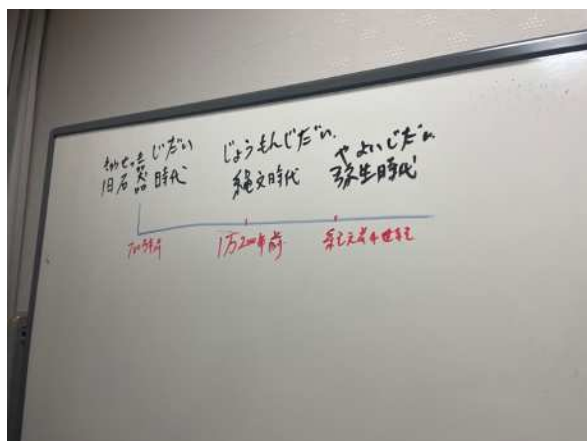
①活動の最初日—基礎から日本語を知ろう



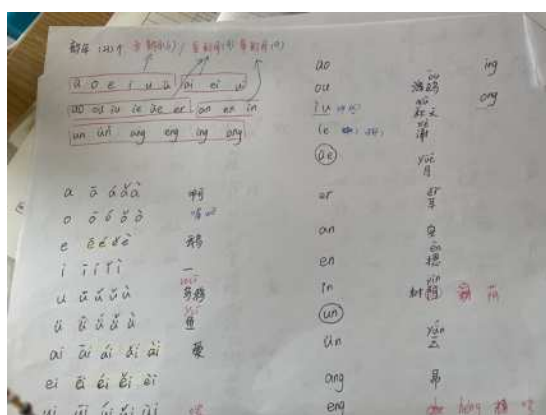
②日本語で自己紹介しよう



③日本語の発音についての授業



④社会科の内容について基礎から知ろう



⑤中国語の拼音練習

2. ESD の視点

①事業を通じて、参加者にどのような気づきや意識・行動の変容があったか

- (1) 支援者が子どもたちと一緒に探求する姿勢を持ち、一方的な教え込みとはならないよう留意した。
- (2) 留学生同士で振り返りを行うことで、学び合いの機会を設けた。
- (3) 教科学習支援を通じて、外国につながる子どもたちが抱える教科教育課題の解決に実践的に取り組んだ。

②どのように学び合いを取り入れたか

留学生スタッフ同士で定期的に学び合う機会を設けたことで、お互いのスキルアップにつながった。また、教科学習支援の中でも異文化交流を行うことで、支援者と受け手の双方向の学びが生まれた。

③どのような学びと実践を結び付ける工夫を行ったか

教科学習支援では子どもたちの理解度を随時確認しながら指導を行い、学びと実践を結びつけた。スタッフ同士の改善点の共有を通じて、実践を振り返り、さらなる改善につなげた。

<p>3. 取組の成果（事業計画書に記載した事業の目的・目標をどのように達成できたか。事業を実施してどのような成果があったか。）</p>
<p>教科学習支援を通じて、外国につながる子どもたちの日本語力と学習の定着を確実に図ることができた。また、異文化交流の時間を設けたことで、子どもたちの異文化理解を促進する機会を提供できた。留学生スタッフ自身も、互いに学び合うことでスキルアップが図れた。当初計画していた多文化共生ワークショップと留学生向け日本語教育講座は、スタッフ不足と予算の関係で実施することができなかった。しかし、外国につながる子どもたちへの教科学習支援という最重要課題については、着実に取り組むことができた。留学生ボランティアの育成にも一定の成果が見られた。</p>
<p>4. 今後の課題と展望（事業がどのように岡山地域の ESD の取組と持続可能な社会づくりの発展・継続につながるか）</p>
<p>(1) 課題 スタッフ数の確保が課題となり、一部のプログラムが実施できなかった。 多文化共生意識の醸成や、ボランティアの専門性向上への取り組みが不十分であった。</p> <p>(2) 展望 来年度は計画段階からスタッフと予算を十分に確保する 教科学習支援に加え、多文化共生プログラム、留学生研修を着実に実施する 地域に対する情報発信力を高め、活動の裾野を広げていく 2023 年度は一部の活動に課題が残されたものの、最重要の外国につながる子どもの支援については着実に成果を上げることができた。2024 年度は ESD の理念に則って教育支援とともに多文化共生社会の実現に向けた幅広い活動を展開していく。</p>